

第4号 熊本市後藤是山記念館だより

居 成 淡

昭和32年(1957年)8月発行の俳誌『ホトトギス』に、高濱年尾氏の「博多節」という随筆があります。それにハツとする話がかかれていました。高濱年尾は俳人・高濱虚子の長男であり、自らも俳人として活躍し、昭和34年に父・虚子から『ホトトギス』の主筆を引き継いでいます。

この随筆「博多節」には、年尾氏が九州旅行の二日間にあたる吟行を終え、福岡に戻り、俳人・片岡片々子(へんぺんし)邸に立ち

んが歌って聞かせた歌の中に東洋のロダンといわれた彫刻家・朝倉文夫の歌詞があったというのです。実はこれが是山と朝倉文夫との正調博多節にまつわるエピソードにつながったのです。

是山と朝倉文夫は3歳違いながら竹田中学校時代の同級生で、朝倉文夫との正調博多節の思い出が、『是山小話』(平成2年発行)の中の随筆「正調博多節」(昭和34年著)に出てきます。

大正13年には是山は九州日日新

是山と朝倉文夫と「正調博多節」

寄った時のことが書かれています。

この日はたくさんのお弟子さん方も集い、年尾氏には正調博多節を聞かせようと、博多水茶屋で芸妓をしていたお秀さんも呼ばれていました。この時お秀さんは78歳。目が不自由になられていたそうですが、実はこの人こそ大正時代、正調博多節を世に広めた功者なのです。宴に入り、お秀さんの唄が始まります。そして年尾氏に博多節を教えます。その時お秀さ

聞社の新社屋を使って朝倉文夫の率いる東台彫塑展を開催するのですが、博多に来ていた朝倉文夫からその打ち合わせのためと呼びだされ、そのときのこと書かれています。是山はすぐに博多へ向かいますが、顔を合わすなり打ち合わせよりも先に、昨日の晩、初めて会ったという博多節の名手お秀さんの話をはじめ、そのお秀さんをその夜、旅館に呼ぶのです。そして翌日は日田で市長主催の「朝

倉氏招待会」があり、そこにもお秀さんが同行します。宿では夜を徹して博多節の創作を試み、歌詞ができたらずいにお秀さんの糸にかけてもらい、及第したり手直ししたり。是山も10首ほど作ったといひます。朝倉文夫は是山のそれを博多へ持ち帰ると奉書に清書し、お秀さんに贈ります。是山によればその時の歌詞が正調博多節の中でいくつか唄われているといひます。そこで是山の歌詞を探してみました。残念ながらどれかわかりません。その代わり、朝倉文夫の作詞した歌が見つかりました。それが高濱年尾氏が聞いた歌と同じかどうかはわかりませんが、それがこれです。

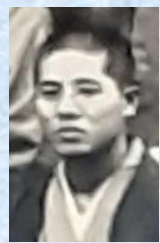
〆御衣(ぎよい)を捧げて泣く秋の夜に月がさしこむ榎寺(えのきでら)

「御衣」とは高貴な方のお召し物のこと、「榎寺」とは大宰府に流された菅原道真の配所であった榎社のことです。何となく切ない思いにさせられる歌詞です。

こんなエピソードも是山と朝倉文夫との友情の証です。当記念館には是山と朝倉文夫とが写る写真も常設展示されています。

大正デモクラシーの中の是山(その2)

文芸に懸ける情熱



31歳の是山

後藤是山は明治45年(1912年)1月、蘇峰の国民新聞社で記者留学を終えて熊本に帰った後、九州日日新聞社(以下「九日」という。)で文芸欄の拡充にも尽力する傍ら、短歌、俳句の文芸振興にも熱心に取り組みます。

もともと是山は竹田中学校時代(17歳頃)、東京の新聞『萬朝報』の与謝野晶子選の短歌欄に投稿していた常連で、特選を受賞することもありました。賞金は1円。その賞金で文芸雑誌を2、3冊買い、残りは友達に饅頭をごちそうしていたといえます。

こうした素養は、東京での記者留学中、歌人の与謝野晶子や俳人の高濱虚子らに会ったことで、後の是山の活躍に大きな刺激を与えたようです。また熊本へ帰る直前、明治44年12月ごろのことですが、正岡子規の弟子である俳人・

内藤鳴雪にも会い、この時、俳句の「や」の使い方について教えを受けました。是山は、このことが俳句を始める大きなきっかけとなり、晩年、「鳴雪に会わなかったら俳句をやることにはならなかっただろう」とも述べています。

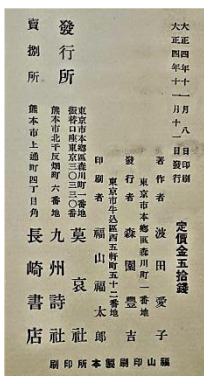
◆短歌雑誌『山上の火』などの発刊

大正に入り、自らの短歌や俳句の活動も広げていきます。

まず大正4年(1915年)5月、九日で同僚となった森園天涙(もりぞのてんるい)とともに九州詩社を起こし、短歌雑誌『山上の火』を創刊しました。森園天涙は是山よりも3歳年下で、鹿児島県上東郷村藤川(現在の薩摩川内市東郷町藤川)の生まれです。大正2年(1913年)に九日に入社しています。

この雑誌の誌友には歌人の上田沙丹(うへださたん・五高、東大に進み、大正日日新聞の記者になった)、波田愛子(なみだあいこ・のちに悲劇の歌人ともいわれた)らがあり、この雑誌は短歌だけでなく、評論、詩なども掲載され、90ページ程に及ぶこともあった。

といいます。はじめ九州詩社は天涙が住んでいた北新坪井町が発行所となっていました。天涙が大正4年9月に上京した後は、是山の住所である北千反畑町6番地が発行所となっています。九州詩社は『山上の火』の発行だけでなく、大正4年11月には、波田愛子の歌集『待宵草』を東京の莫哀社と共同で出版しています。天涙や是山らが同人を広く世に出そうとする姿勢が伺えます。『山上の



美しい装丁の波田愛子歌集『待宵草』(左)。発行所の「九州詩社」は、当時の是山の住所である「北千反畑町6番地」となっている。

火』は残念ながら天涙の上京後、大正5年末までで廃刊となりましたが、第五高等学校(現在の熊本大学)の学生や熊本市内外、県外からも寄稿があつて、是山は後年「地方の短歌雑誌としては異彩あるものであった」と評しています。

◆俳誌『銀杏』や『蝸』の発刊

熊本の新派俳句の隆興は第五高等学校の英語教師として赴任した夏目漱石の存在が大きく、熊本で新派俳句を盛んにします。明治31年(1898年)10月、当時の五高生達や、池松辻巷(いけまつうこう)、渋川玄耳(しぶかわみみ)ら、竹田双松を中心に俳句結社「紫溟吟社(しめいぎんしゃ)」が創立されたのもその大きな流れです。「紫溟吟社」は、熊本で新派俳句を普及させ、根づかせることが目的とされ、漱石が熊本を離れたあと明治34年(1901年)6月から翌35年5月まで機関誌『銀杏』が刊行されています。是山は、この明治後期に活発だった俳句運動を目指し、大正6年、7年頃、「紫溟吟社」にも参加した竹田双松とともに俳誌『銀杏』を復活させました。

残念ながらこの『銀杏』の刊行は長くは続かなかったようですが、昭和に入っては山らが創刊した俳誌『かはがらし』の第100号記念誌(昭和10年7月1日発行)の中では、『かはがらし』は)第1期の『銀杏』以来の精神を継承し、あくまで郷土雑誌としての歩みを続け、いかに未熟であっても(中略)、世上の流行流派の外に超然として、独自一己の境地を開拓せんとするのであった」と、『かはがらし』に託した『銀杏』の精神を語っています。

また是山は大正の同じごろ、俳誌『燄(ほのお)』の創刊にも参加しています。この俳誌には漱石離熊後の紫溟吟社を守った広瀬楚雨(ひろせそう)や、後に九日の「九日俳壇」の選者となる三浦十八公(みうらじゅうはちこう)、後には山と『かはがらし』創刊を共にする末次青雉(すえつぐせいち)らがいきました。

◆是山の若き日のエピソード

く高濱虚子来熊をめぐってく
是山は九日でも、当時閑文字として小さく扱われていた文芸欄を充実させていきます。その集大成

ともいうべき紙面が大正6年元旦の「懸賞文芸」の面で、高濱虚子や与謝野晶子ら一流の俳人、歌人らが選者を務めています。

高濱虚子は、この「懸賞文芸」の選者を務めたことがきっかけとなり、この年の10月、初めて熊本を訪れました。しかしこれには若き山と句友たちのエピソードがありました。

是山は昭和28年(1953年)10月発行の『ホトトギス』に「若き日の虚子像」として、このことを詳しく書いています。

エピソードのきっかけはその年の10月9日付けで大阪の俳人・



大正6年10月21日、高濱虚子来熊時の、洗場の綿屋旅館での記念写真。中列中央が虚子。その列、右から2人目が是山。

青木月斗(あおきげつと)から送られてきた是山宛ての葉書でした。月斗は正岡子規の門下で九州でも熱心に句作の指導に当たっていました。

この時の葉書には、概略次のようなことが書かれていました。

虚子が松山に帰省し、その後10月20日ごろ博多に向かい熊本へ行くとのこと。来熊の日取りは虚子が貴下へ連絡されるとのことだ。来熊は初めてなので、紫溟吟社の仲間などと集まり気炎を上げたらどうだろうか、というものでした。

是山はじめ地元の俳人は浮足立ち、今日か今日かと連絡を待ち受けます。ところがいつまでたっても連絡がなく、三浦十八公が気色ばんで是山のところへやってきます。そして十八公が「虚子は福岡に来ているぞ、あしたは東京に帰ると今朝の博多日日新聞に出ている」といのです。二人は、「博多の連中が2日とも(虚子を)独占して熊本に遣らんのは怪しからん」と憤慨し、すぐに博多へ向かいます。そして宿となっている奥の堂町の醸造家・加野宗三郎氏の家に行き、博多の句友相手に喧嘩腰で

す。「初めて九州入りした先生を、明治新俳壇発祥の地である、漱石以来の熊本に、一日だけでもやらぬという理由は無い」と直談判。ついには虚子を熊本に連れて来るのです。10月20日のことです。

熊本ではその夜、急ぎよ50人近くが集まり句会を開きます。句会は10時過ぎまで続き、洗馬の綿屋旅館へ向かいました。是山は、広瀬楚雨や末次青雉、三浦十八公らと同行し、一晩通して虚子を囲み俳論を交わしました。そして次の朝は、昨夜集まった幾人かがまた集まり、揮毫を頼んだり、歓迎の小宴をしたり、記念撮影をしたりして過ごします。そして気が付けば汽車の時間まであと20分。今度は慌てて二人曳の人力車7、8台を仕立てて大急ぎで熊本駅へ向かい、何とか滑り込みで虚子を汽車に乗せたのです。

是山たちには感激の2日間でしたが、虚子にとってもよほど印象深かったでしょう。40年ほど経ってからの是山への手紙で、「あなたの行き届いた幹旋で愉快な2日間を過ごした記憶は、(中略)今なお鮮明に頭に残っています」と思い出深く回想しています。

〈主な参考文献〉

熊本県史 近代編第2、3 熊本県
黎明期の人々 西日本文壇前史 原田種夫著

後藤是山記念館へ

行こう！

淡成居の庭に建立された

是山の『筆塚』

この筆塚は昭和25年11月25日に建立されたものです。

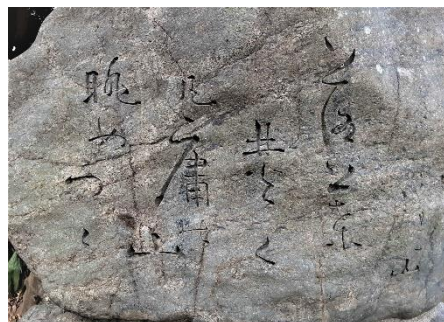
落葉焚く凡庸の山眺めつつ

と是山が昭和15年(当時54歳)に詠んだ句が刻まれています。

除幕式は午後1時半から行われ、高瀬や大川などからの参加者も含め、東火社の諸友40名ほどが出席し盛大に行われました。夜には「落葉句会」が開催されたそうです。



昭和25年11月25日に淡成居庭内に建立された是山の筆塚。



碑石に刻まれている是山筆の句。
「落葉焚く凡庸の山眺めつつ」と刻まれている。

是山はこの年の『東火』12月号で、この筆塚についてこう述べています。

「私は焚火が好きである。取り立てて云ふ程の名もない凡庸な山々、龍田山、金峰山等を眺めて云々。(中略)文筆生活40余年、私如き凡庸なるものゝ原稿が紙屑同様捨てられて仕舞ふ。それで最初は原稿塚を考えたが、(中略)語呂が如何にもごつごつしてゐる。それでいっそ筆塚にしたらと思ひ立った。」と述べています。

碑石は御船町で見つかった竹葉石(ちくようせき)が使用されており、石碑の裏側には、「東火社諸友建立」と刻まれています。

熊本市記念館探訪

熊本藩川尻米蔵 (南区川尻3丁目3-30)

熊本藩川尻米蔵は令和5年(2023年)に開館した記念館です。

川尻米蔵と加勢川に面する船着場跡、御船手渡し場跡の1帯が国指定史跡として指定されています。

この記念館では、熊本藩の物流・水運の様子や川尻の歴史も知ることができます。また米蔵の内部の頑丈に組まれた木造建築構造も圧巻です。

この川尻米蔵のすぐ近くに「川尻公会堂」があります。この公会堂は、銘酒瑞鷹醸造元の基礎を築き、多くの公共にも尽力した吉村彦太郎氏が、川尻の発展のためにと、昭和5年(1930年)に贈った施設です。この敷地内には彦太郎氏の業績をたたえ昭和6年12月に建立された『懷徳碑』があります。実はこの碑文、後藤是山が書いているんですよ。

川尻米蔵ご来館の際は、公会堂にもお立ち寄りください。

(熊本藩川尻米蔵 TEL096-358-8008)



年貢米が収納されていた「外城蔵」跡

第4号

熊本市後藤是山記念館だより
『淡成居』

発行日

令和7年(2025年)3月8日

編集・発行

熊本市後藤是山記念館長 植木英貴
(熊本市文化財課所管)

〒860-0950

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

電話・ファックス

096-382-4061

開館時間

午前9時30分～午後4時30分

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12/29～1/3)

入館料

大人 200円

小人 100円

